地理学報告　第49号　45～48　1979

小さな島の二つの気候

原　　昭　宏*

フィジー（Fiji）の休日は雨に終始した。着いた日（8月26日）から帰る日（8月30日）まで毎日雨が降った。休みなく降っているわけではなく，曇り空から思い出したように雨が落ちて来る。そのような天気のため，非常に涼しく，上着がほしいくらいだった。南半球だから冬であるとはいえ，南緯17°20′，ハワイのオアフ島よりも低緯度であるというのに。出発前に調べたところでは，4月から11月までは乾季ということだったので，“中緯度高圧帯の支配下に入るのだな”と私なりに納得し，輝やく太陽のもと，すきとおった珊瑚礁の海でマリンレジャーを楽しむつもりであったのが，まったくあてがはずれた。水泳パンツもサングラスもスーツケースに納まったまま，18,000kmを往復したのであった。なぜこのようなことになったのか。現地で入手した文献や地図を調べ，野外観察をした（遊びに行っても商売気が抜けないのは良いのか悪いのか）結果わかったことであったが，どうやら私の滞在した場所，ビチレブ（Viti Levu）島の南岸パシフィックハーバー，が悪かったようである。このことを説明する前に，フィジーの地理的バックグラウンドについて簡単にふれておく必要があるだろう。

フィジー諸島は西南太平洋に散在する諸島群のほぼ中央、トンガ王国とニューヘブリデスの間，東経176°53′から西経178°12′。および南緯15°42′から20°02′の間に位置している。フィジー諸島は180°の子午線の東西にまたがっているが，国際日付変更線は西半球側に折れ曲って，フィジー全体が一つの時間帯に入るようになっている。南北方向の広がりは東西方向のそれにくらべて大きいが，おもな島々は南緯15°42′から20°02′の間に分布している。これはオーストラリアのケアンズ，タヒチ，リオデジャネイロとほぼ同じ緯度である。フィジー諸島は約194,000km²の範囲に散在しているが，陸地面積はほぼ10％の18,200km²に過ぎない。島の数は約500。小さな岩礁まで入れれば850といわれるが，人が住んでいるのはそのうちの100くらいである。最も大きいのはビチレブ島で面積10,345km²，2番目がその北東に隣接しているバヌアレブ（VanuaLevu）島で面積9,915km²。この二島で総面積の87％を占める。特にビチレブ島はあらゆる面でフィジーの中心的存在で，人口の73％がこの島に住み，首府のスバ（Suva）市をはじめ，サトウキビの積出港として重要なラウトカ（Lautoka），国際空港のあるナンデイ（Nadi あるいは Nandi）などの都市が発達している。

ビチレブ島は構造的にはフィジーの他の大部分の島と同じく大陸性で，太平洋をとりまいて大陸と海盆を界するいわゆる安山岩線の大陸側にある。火山岩，変成岩，堆積岩など岩種に富み，これは道路沿いの露頭によっても明らかであった。激しい褶曲が見られるところもあって，この島が環太平洋造山帯に属していることを認識させられた。ビチレブ島は東西140km，南北98kmの楕円形をしており，島の大部分を山地が占めているが，東部に南東流するレワ（Rewa）川，西部に南西流するシガトカ（Sigatoka）川と北北西に流れるバ（Ba または Mba）川があって深い谷を刻んでいる。このため，島の中央をほぼ南北に走る山脈が形成されて

*愛知教育大学地理学教室

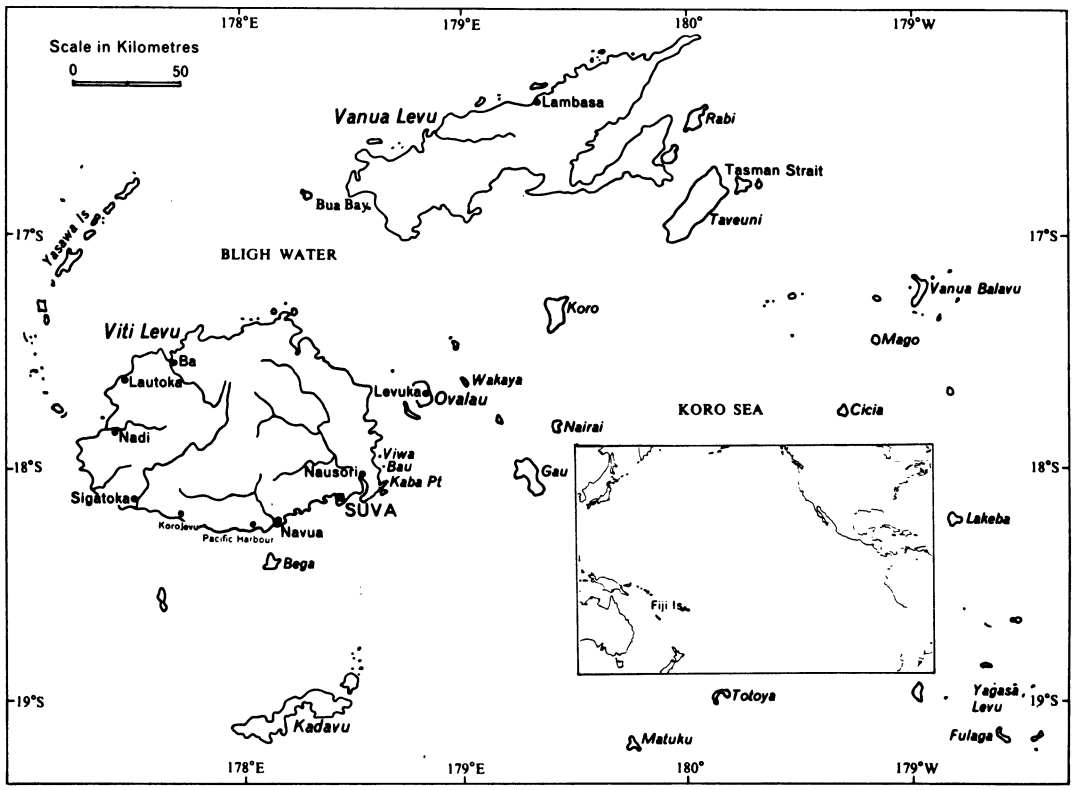

Fig. 1　フィジーの位置

いる（Fig. 2）。楕円の短軸に沿って走るこの山脈は標高1,000～1,300 m の峰々からなり，ビチレブ島を気候的に東西に二分している。Fig. 3 に示したように，1月には熱帯収束帯（ITCZ）がフィジー付近にあるが，7月には太陽とともに北へ移動し，フィジーは南東貿易風の支配下に入る。そこで，夏（フィジーは南半球にあるため，日本とは季節が逆になることに注意）にはビチレブ島全体に雨が多く降る。冬になると，山脈の風上側である島の東半分には雨が降るが，風下側の西半分は乾燥する。だから，ビチレブ島では東部は年中多雨，西部は乾季と雨季が交替するという気候になっているわけである。年降水量は，西部では1,800mmくらい，東部では海岸に近い平地で3,000mm，山地では7,000mm近くにも達する。私の滞在地は，たまたま，年中多雨地域だったわけで，旅行社の宣伝文句に乗せられて，充分な下調べを怠たったのは，地理学者としては具合の悪いことである。しかし，一般の旅行者は旅行社の言うことを真に受けて，海のレジャーを楽しむつもりで金を払ったのであるから，滞在地の不適切さはまったく旅行社の責に帰せられるべきで，返品のきかない不良品を買わされたようなものである。

それはさておき，このような東部と西部の気候の差異は，景観にもはっきりあらわれている。国際空港のある西海岸のナンディから，東部にある首府のスバに向って，南岸沿いの道路（Queen's Road と呼ばれる）を行くと，町を出はずれてまず目に入るのは，どこまでも続くサトウキビの畑である。周知のように，サトウキビの栽培には成熟期と収穫期に乾燥が必要である。イギリスが植民地時代にビチレブ島の西部にサトウキビのプランテーションを開いたのは，ここに明瞭な乾季が存在したからであった。私がここを通った時は，ちょうど収穫期で，刈り取られたサトウキビが鉄道で

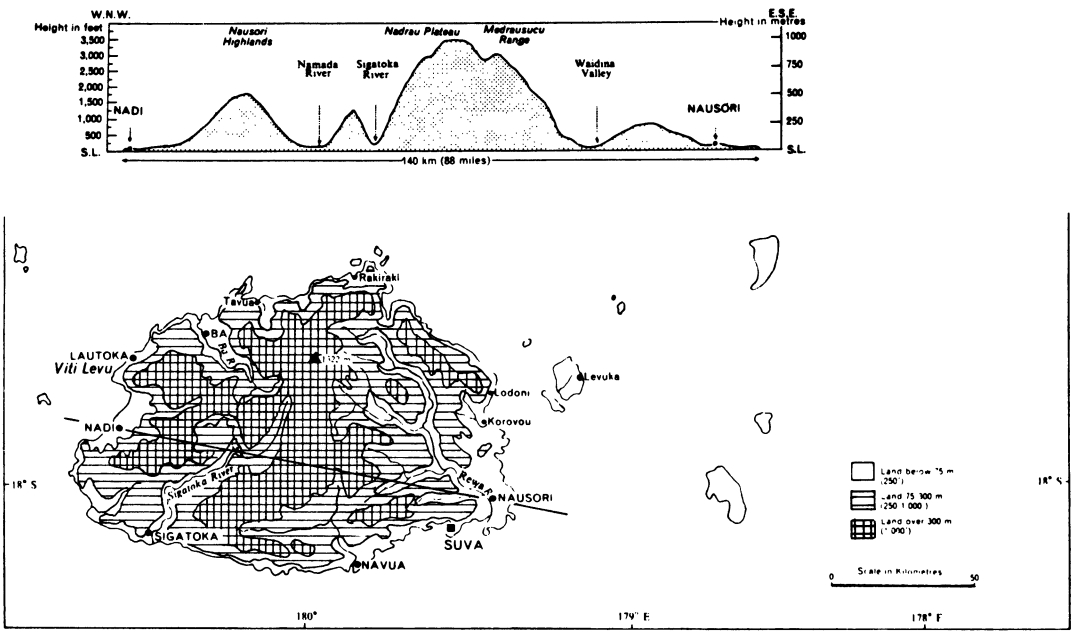

Fig. 2　ビチレブ島の地形

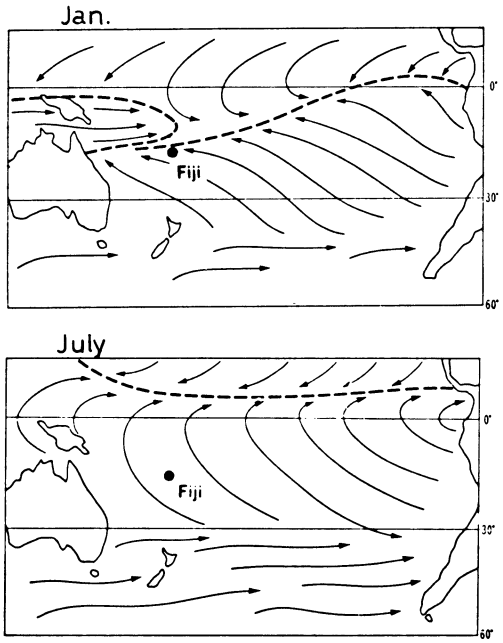

Fig. 3　南太平洋の風系とITCZ（福井英一郎原図に加筆）

運搬されていた。もちろん空は青く澄みわたり，南国の陽の光が燦々と降り注いでいた。サトウキビ畑は低平地か，ゆるやかな丘陵地につくられていて，斜面の勾配がある程度以上になるとみられなくなる。利用されていない土地は，ほとんど草地で，ところどころに灌木の茂みがあり，喬木はぽつりぽつりとしか見られない。かつて訪れたインドのデカン高原北部のサバナによく似ている。部分的には植林が行われており，見たことのない針葉樹（おそらく耐乾品種であろう）が整然と植えられていた。フィジーでは将来，木材を重要な輸出商品とする意向で，植林を試みているのだということを聞いた。サトウキビ畑とサバナが交互にあらわれる風景はシガトカのあたりまで続く。シガトカはシガトカ川の河口にある町で，北西岸のラウトカと並ぶサトウキビの集散地である。フィジー唯一の鉄道はラウトカとシガトカを結んでおり，沿線のサトウキビ畑の収穫物を運び出すのである。シガトカを過ぎて東へ進むと，草地が少なくなり樹木がふえてくる。山地が海に迫っていて，平地，緩傾斜地が少ないこともあって，サトウキビ畑は完全に姿を消し，かわってココヤシが見られるようになる。ナンディから3時間，100kmほど走ってコロレブ（Corolevu）まで来ると，植生は熱帯雨林の様相を見せはじめる。土壌もそれま

での黒褐色から赤色に変る。私の乗ったバスは，ここで昼食のための休憩をとったのだが，このころから空に雲が多くなり，ポツポツと雨滴が落ち始めた。“熱帯特有のシャワーで，1時間もすれば止むだろう。”と私は思ったのだが，東へ進むにつれて雨は止むどころか強くなり，滞在地パシフィックハーバーに着いた時には，本格的な雨になっていた。そして雨模様の天気は滞在していた間中続いたのであった。コロレブで出会った雨はにわか雨ではなく，私が乾燥地帯から多雨地帯へ入ったということなのであった。地図を見ればわかるように，山脈はシガトカとコロレブの間で海へ落ち込んでいる。しかも山地が海岸ぎりぎりまで迫っているので，この間が明瞭な気候区界になっているのである。静岡県くらいの小さなこの島で，このように対照的な気候地域が存在することを経験したのは，ちょっとした驚きであった。

帰る日，やはり朝から雨が降っていた。しかし，シガトカを過ぎると青空が広がり，行く手は美しい夕焼けだった。振り返ると山々の頂きは厚い雲にかくれていた。飛行機に乗る前，空港近くのホテルで食事をしたが，そこのパンフレットに Sunyside of Fiji, Nady と書いてあった。フィジーには Sunyside と Rainyside の二つの顔がある。遊ぶつもりで来るのなら，ぜひ西海岸に滞在すべきなのだ。私も遊ぶつもりで来たのだが，もし西海岸に滞在していたら，フィジーの二つの顔を知らないでいたことだろう。

帰りの飛行機の中で，この旅行の最初から抱いていた疑問が解けたと思った。その疑問というのは空港の立地についてであった。フィジーで唯一の国際空港はナンディにある。ナンディから首府のスバまでは，北廻り(King's road 経由)でも，南廻り(Queen's road 経由)でも200km以上あり，自動車で5～6時間はかかる。悪名高い成田空港でさえ60kmだ。なぜこんなに離れた，島の反対側に国際空港を置いたのか。それは気候のせいにちがいない。雨天日数が非常に多いスバの近くでは，発着不能になる場合が多く何かと具合が悪いであろう。一方，ナンディでは，冬の間は毎日晴天が続くのである。冬といつても7月の平均気温22.8℃(ナンディ，1949～1961)で，北半球主としてアメリカからは避暑に，南半球主としてオーストラリア，ニュージーランドからは避寒のために人々がやって来る多客期なのである。観光収入が最大の外貨獲得手段であるこの国にとって，観光シーズンに晴天が続く西部に国際空港を置くのは当然のことだったのであろう。ただし，空港立地に関する考察は立証していない。為念。

この小文のために参照した主な文献は次の二つである。
福井英一郎編：世界地理11，オセアニア。朝倉書店，1972。
G.J.A. Kerr and T.A. Donnelly : Fiji in the Pacific ; a history and geography of Fiji。The Jacaranda Press. 1976.